

## RUBeC 演習を終えて

右川 太一郎

Taichiro UKAWA

機械システム工学専攻修士課程 1年

### 1. はじめに

2017年8月19日から9月4日までの期間、龍谷大学の留学プログラムのひとつである「RUBeC 演習 I」に参加した。「RUBeC 演習 I」では、アメリカ合衆国カリフォルニア州のバークレー市にある Jodo Shinsyu Center にて、国際発表にて投稿・発表が出来ることを目的として、英語のライティングとプレゼンテーションスキルについて学習した。また、現地の企業の Keysight Technologies 社、並びに龍谷大学の協定校であるカリフォルニア大学デービス校 (UC Davis) に訪問した。

### 2. 参加目的

私が RUBeC 演習に参加した理由は、修士2回生で参加する国際学会に向けて、英文での論文を執筆する力を身につけ、英語でのプレゼンテーションスキルの向上を図るためである。また、アメリカの一般家庭でのホームステイを通じて、アメリカの文化や社会、日本との違いを肌で感じることで、私自身の視野を広げたいという思いから参加した。

### 3. 授業内容

#### 3.1 テクニカルライティング

テクニカルライティングの授業では、事前に準備した、英文で作成した自身の研究の要旨を授業で学んだことを基に正しい文法、相応しい表現に少しずつ修正をしていった。例えば、事前に作成した文章中で、結論を述べるための接続詞として、「だから」という単語を「so」と訳していたが、論文のようなフォーマルな文章では、「therefore」を使用することが適切であるということ学んだ。また、教員の方から様々な指導を頂き、修正前よりも正確で読み

やすい要旨が出来上がると同時に、英語の論文を書く上での基礎知識も身につけることも出来、英文を書く自信が付いた。

#### 3.2 プレゼンテーション

プレゼンテーションの授業では、自分の好きなトピックを英語で発表する2分間スピーチや、英語で作成した研究のパワーポイントの発表を通じて、英語の発音や適切なジェスチャーの仕方などプレゼンテーションを行う上で重要なスキルを学んだ。授業の中で特に印象に残っていることは、チャンキングという、聞く相手が聞き取りやすいように一つの文章中でいくつか文章を区切って話す手法である。どこで文章を区切るかなど、明確なルールが存在することを初めて知り、国際発表に臨む前にこのような手法があることを知れてよかった。

### 4. 企業・指定校訪問

#### 4.1 UC Davis 訪問

UC Davis は、カリフォルニア州デービス市に本部を置く、アメリカ合衆国の州立大学であり、10校あるカリフォルニア大学のうちのひとつである。今回のキャンパス見学で特に印象に残っていることの1つは、UC Davis のあらゆる面での規模の大きさである。UC Davis のキャンパスの大きさは、約21 km<sup>2</sup>と非常に広大であり、そのキャンパス内には、ボーリング場や劇場などの娯楽施設が充実しており、警察署までであるらしい。当然、研究設備も大規模なものを所有しており、地質工学の研究室の設備を見学した際、龍谷大学のマシニングセンタの数倍はあろうかというほどの遠心分離機があった。地震が起きた際に地中で生じる応力を解析するための装置であるらしく、1回動かすと1年位稼働させ続けるらしい。動かすだけで数百万円かかるとのことで、それだけのコストと時間を一つの実験にかけられるというのは、実験を主体とした研究室に所属している研究生としては非常に羨ましいと思った。

## 4.2 Keysight Technologies 社訪問

カリフォルニア州サンタローザの Keysight Technologies 社の本社に企業訪問を行った。Keysight Technologies 社は、1939 年に創業を始めた歴史ある企業であり、カリフォルニア州サンタローザを拠点として、世界 100 ヶ国以上に拠点を持つ世界有数の計測器メーカーである。電子計測器やソフトウェアを専業として、製品の開発・生産を行っている。企業訪問では、現役で働いているエンジニアの方々に引率していただき、製品の製造や検査などの工程を見学した。様々な説明を受けた中で最も印象に残っていることは、Keysight Technologies 社が用いている製品作製の仕組みである。Keysight Technologies 社では、製品製造において、子会社や下請け企業を利用せず、研究開発から製品やその部品の製造、検査、発送まですべてを自社で行っている。日本では、ある製品を製造する際は、子会社や下請け会社のみならず、様々な企業が協力して製品を作製している。私もそれが当然だと考えていたが、Keysight Technologies 社のような仕組みを用いている企業があるということを知れたのは良い経験になった。

## 5. ホームステイ先での生活

私がホームステイ先の家族はキリスト教徒であり、食事の前や出かける前などにお祈りを捧げることを始めとして、宗教上のルールの違いから戸惑うことも多かったが、キリスト教について多くのことを知ることができた。また、カリフォルニア州は干ばつにより、水をあまり使ってはいけないというルールがあり、シャワーを浴びるときは大変だった。ホストファミリーの方に「水を使うときは同時に知

恵も使いなさい」と言われたことが印象に残っている。

日常会話は当然英語で行われるため、コミュニケーションをとるのが大変だった。普段から多少は英語を勉強していたため、相手の言っていることは理解できるが、肝心の喋ることが全くできなかった。特に発音が全くできず、例えば、ホストファミリーの方に「I want to eat some blueberries」といった。しかし、私の「blueberries」の発音が悪すぎて、私が何を食べたいのかが全く伝わらず、発音の大切さを思い知った。英語でのコミュニケーションがほとんど取れないにもかかわらず、ホストファミリーの方々は根気強く熱心に話しかけ下さり、パークレーの歴史やキリスト教のことを始めとして、授業では学べない様々なことを学ぶことが出来た。

## 6. おわりに

約 2 週間という短い期間ではあったが、アメリカの文化や日本との違いを多く知ることが出来、国際学会へ参加するにあたって必要な基本的な知識を学ぶことが出来た意義のある 2 週間であった。また、アメリカにつく前は犯罪に巻き込まれないか、ちゃんとコミュニケーションは取れるかなどを始めとして、様々な不安があった。実際、不安が的中した出来事や文化の違い戸惑うことも多々あったが、それでも何とかなった。この「何とかなった」というのが私にとって非常に良い経験になった。今回で、海外へ行くことに対する抵抗感が大きく減った。今後チャンスがあれば、仕事、プライベート関わらず、積極的に行くようにしたいと思えるようになった。